

二 釈尊・七高僧

親鸞聖人は、釈尊の教えに信順し、「南無阿弥陀仏」を明らかにした七人の方々を七高僧（印度「龍樹」「天親」中国「曇鸞」「道綽」「善導」日本「源信」「源空」として浄土真宗の祖師として選ばれました。七高僧は浄土の教えに帰して、本願を信じ、念仏を行じた仏者であります。『正信偈』（正確には『正信念仏偈』と言う）にはその七高僧を通して「南無阿弥陀仏」となって伝えられてきたいわれが説き明かされています。

釈尊	印度	紀元前五世紀ごろ
龍樹	印度	二～三世紀ごろ
天親	印度	四～五世紀ごろ
曇鸞	中国	四七六～五四二
道綽	中国	五六二～六四五
善導	中国	六一三～六八一
源信	日本	九四二～一〇二七
源空	日本	一一三三～一二二二

三 教行信証

親鸞聖人の代表の著書で、印度・中国・朝鮮・日本の経典や論文、註釈書を引用し、そこに自らの宗教的信念にもとづく独自の解釈を加えた書物です。親鸞が自らの求道の歩み、その信心と思想を展開したものです。『正信偈』はこの『教行信証』全六巻中の「行巻」に収められています。

〔構成〕 「教巻」「行巻」「信巻」「証巻」

「真仏土巻」「化身土巻」

四 正信偈

『正信偈』は、正確には『正信念仏偈』といいますが、それは、「念仏の教えを正しく信ずるための道理を述べた歌」というほどの意味です。漢文で書かれた詩で、七文字を一句とし、百二十句、六十行からなっています。

全体を大きく二つの部分に分けて見られています。一つは、「法蔵菩薩因位時」から「難中之難無過欺」までを「依経分」といわれています。仏の大悲が説かれている『大無量寿経』の要となる教えについて讃嘆してある部分です。もう一つは、その後の「印度西天之論家」から「依積分」といわれています。七高僧お一人お一人の教えを紹介し、それぞれの高僧の徳を讃えてある部分です。

「依経分」↓「大聖の真言」 釈尊の言葉。

「依積分」↓「大祖の解釈」 七高僧の解釈。

五 偈前の文

親鸞聖人が『正信偈』製作の理由として、『正信偈』の前に著した言葉です。

おおよそ誓願について、真実の行信あり、また方便の行信あり。その真実の行願は、諸仏称名の願なり。その真実の信願は、至心信樂の願なり。これすなわち選択本願の行信なり。その機は、すなわち一切善悪大小凡愚なり。往生は、すなわち難思議往生なり。仏土は、すなわち報仏報土なり。これすなわち誓願不可思議、一実真如海なり。『大無量寿経』の宗致、他力真宗の正意なり。

ここをもつて知恩報徳のために宗師（曇鸞）の釈を披きたるに言わく、

それ菩薩は仏に帰す。孝子の父母に帰し、忠臣の君后に帰して、動静己にあらず、出没必ず由あるがごとし。恩を知りて徳を報ず、理宜しくまず啓すべし。また所願軽からず、もし如来、威神を加したまわずは將に何をもつてか達せんとする。神力を乞加す、このゆ

えに仰いで告ぐ、と。已上

しかれば大聖の真言に帰し、大祖の解釈に閱して、
仏恩の深遠なるを信知して、正信念仏偈を作りて曰わ
く、

（『教行信証』行巻）

【意識】

およそ、阿弥陀仏の誓いには、真実の行と信とがあり、
また仮に設けた方便の行と信とがある。このうち、その真
実の行を誓われた願は、第十七の「諸仏称名の願」であり、
その真実の信を誓われた願は、第十八の「至心信樂の願」
である。これこそは、如来が選び取られた本願の行と信と
である。

この願に救われる人は、すなわち善人や悪人、大乘や小
乗を奉ずる世間一般の愚かな人たちすべてであり、その浄
土に生まれるすがたは、難思議往生であり、浄土は報身仏
の報土である。これこそは思いはかることのできない誓い
の不思議であり、すべてを包容する唯一絶対の真実のすが
た（一実真如海）である。すなわち、『大無量寿経』があ
らわすその本旨であり、他力の真の心を正しくとらえた意

趣なのである。

したがって、こういうわけだから、仏のご恩を思い、そ
の徳に報じたいと思つて、浄土の教えの師である曇鸞和尚
の注釈を開いてみたところ、そこにはこう語られている。

「いったい、菩薩は、孝子が父母に仕え、忠臣が君・后
に仕えて、挙措進退は自分勝手なふるまいに走ることなく、
またかならず理由があつてするように、仏に仕えるもので
ある。ご恩を知り、徳に報ずるには、理として、まずこれ
を仏に申しあげるのが当然であろう。また、世の人を救お
うという菩薩の願いはけつして軽々しいものではないが、
もし如来がその勝れた力をおかしくださらないければ、何に
よつてこれを達成しようとするのであろうか。仏の勝れた
お力を乞うほかはない。だから、ここに仰いで申しあげる」
以上。

だから、釈迦仏の真実のお言葉を信じ、祖師方のご注釈
をひもといて、仏のご恩の深いことを知つたその思いを、
ここに「正信念仏偈」を作つて述べたい。

偈前の文について

① 『大無量寿経』

親鸞が最も大切にされた経典です。正確には『仏説無量寿経』と言い、すべての人々が救われる真実の世界である浄土を明らかにした経典です。

それ、真実の教を顕さば、すなわち『大無量寿経』これなり。この経の大意は、弥陀、誓いを超発して、広く法蔵を開きて、凡小を哀れみて、選びて功德の宝を施することをいたす。釈迦、世に出興して、道教を光闡して、群萌を拯い、恵むに真実の利をもってせんと欲してなり。ここをもって、如来の本願を説きて、経の宗致とす。すなわち、仏の名号をもって、経の体とするなり。

(『教行信証』教巻)

【意訳】

その真実の教えを顕かにしているのは、『大無量寿経』

である。この経の大意は、阿弥陀仏が世にすぐれた誓願をたて、広く仏法の蔵を開いて、凡人や小乗の者たちをあわれみて、とくにこの者たちのために功德の宝をほどこされたことを説くのである。釈迦如来が世に出て仏道を説かれ、衆生を救うために、とくに弥陀の慈悲を説いて真実の利益を与えようとされたことを説くのである。それゆえに、阿弥陀仏の本願を説くことをもって、この経典の教えの本意とする。すなわち、「南無阿弥陀仏」の名号をもって、この経典の本体とするのである。

② 真実の行願（諸仏称名の願） ↓ 念仏

第十七願

設我得仏 十方世界無量諸仏 不悉咨嗟 称我名者
不取正覚

たとい、われ仏となるをえんとき、十方世界の無量の諸仏、ことごとく咨嗟して、わが名を称えずんば、正覚を取らじ。

咨嗟：讚歎すること。ほめたたえること。

③ 眞実の信願（至心信樂の願） ↓ 正信

第十八願

設我得仏 十方衆生 至心信樂 欲生我國 乃至十念
若不生者 不取正覺 唯除五逆誹謗正法

たとい、われ仏となるをえんとき、十方の衆生、至心に信樂して、わが国に生まれんと欲して、乃至十念せん。もし、生まれずんば、正覺を取らじ。ただ、五逆と正法を誹謗するものを除かん。

至心…この上なく誠実な心。仏の眞実心によつて与えられたもの。

信樂…教えを信じ願うこと。本願のいわれを疑心なく聞いて信ずる心。

欲生…浄土に生まれたいと願う心。

六 歸敬の文

歸命無量壽如來
南無不可思議光

【書き下し】

無量壽如來に歸命し

不可思議光に南無したてまつる

【意訳】

永遠の仏よ あなたの呼び声に 私は目覺め 量りしれない壽に立ち歸り 思いはかれない光に敬いを捧げます。

① 歸命・南無

(曇鸞のことば)

帰命すなわちこれ礼拝なりと。しかるに礼拝はただこれ恭敬にして、必ずしも帰命ならず。帰命は(必ず)これ礼拝なり。もしこれをもって推するに、帰命は重とす。

【意識】

帰命すなわち礼拝である。ところで礼拝とは、ただ恭敬の意思の表明であつて、必ずしも帰命ではない。一方、帰命は礼拝をふくむのである。これより推察すれば、礼拝より帰命のほうが重い。

(善導のことば・南無阿弥陀仏の意)

「南無」と言うは、すなわちこれ帰命なり、またこれ発願回向の義なり。「阿弥陀仏」と言うは、すなわちこれ、その行なり。

(『観経四帖疏』)

帰命とは、仏が誓いを立てて、それを回らし、さしむけ

るという意味です。その願いの行を阿弥陀仏というのです。南無とはサンスクリット語で「ナモ・ナマス」という言葉で、もともとの意味は腰をかがめてお辞儀するという意味です。

帰命の「命」という字は、中国人の考え方で命令という意味です。帰命というのは命令に順うという意味であります。その意味からいきますと「阿弥陀仏に依れ」という命に順うという意味になります。この場合の命令というのは、これは「教え」を指します。

発願回向とは、どんな願を発すのかというと、浄土に生まれたいという願いを発するのであります。その発した心を他に振り向けるということが発願回向ということなのです。

『阿弥陀仏』…その行なり』とは、その行も我々が自分の心を研ぎ澄ましたり、心を考えていたり、そういう自分でやる行でなく、阿弥陀仏が行じてくださるという意味です。

(善導のことばを受けて親鸞は)

帰命は本願招喚の勅命なり。

本願招喚：如来が私の世界へやって来なさいと、私た

ちを招き呼ぶこと。

勅命…外側からの命令。天皇の下す命令。

味です。量り知れない寿、私たちまでやって来たので「如来」です。

私たちがただ一つ聞かなければならない「勅命」は『阿弥陀仏に南無せよ』という本願の勅命だけであります。

③不可思議光

②無量寿如来

光明無量の願・第十二願

設我得佛 光明有能限量 下至不照百千億那由他諸佛國者 不取正覺

寿命無量の願・第十三願

設我得佛 壽命有能限量 下至百千億那由他劫者 不取正覺

たとい我、仏を得んに、光明能く限量ありて、

下、百千億那由他の諸仏の国を照らさざるに至らば、正覺を取らじ。

たとい我、仏を得んに、寿命能く限量ありて、

下、百千億那由他の劫に至らば、正覺を取らじ。

不可思議光とは、不思議な奇妙なという意味ではなく、人間の思慮・分別では計ることのできない光のことです。

那由多…古代インドの数の単位。きわめて大きな数量。

劫…きわめて長い時間の単位。

無量寿如来とは、量のない寿命ということで、数量と関係のない寿命、始めもなく、終わりもない寿命という意

④光明無量・寿命無量

「光明無量の願」と「寿命無量の願」は阿弥陀仏の光・寿二無量の徳性をあげています。光明は空間的な無限性あるいは無辺性を表し、はたらきが届かないところはないということ。寿命は時間的な無限性で、はたらきに終わりがないということ。どこでも、いつでもという普遍性を表しています。

⑤念仏

親鸞は『正信偈』の最初の二行に、信仰（雑行を棄てて本願に帰す）の意を明らかにした。

念仏ということ自体が、わたしの外のどこかにいらっしやる仏に声をかけ、念ずるということではないのです。たとえば、『大勢至和讃』の第四首には、

超日月光この身には

念仏三昧おしえしむ

十方の如来は衆生を

一子のごとくに憐念す

とあり、それをうけて第五首に、

子の母をおもうがごとくにて

衆生仏を憶すれば

現前当来とおからず

如来を拝見うたがわず

とうたわれています。「衆生仏を憶す」ということから、念仏が始まるのではないのです。それに先だって、「十方の如来は衆生を 一子のごとくに憐念す」ということがあるのです。つまり念仏は、ただ単に「仏ヲ念ズル」ということではないのです。念仏はまず「念ズル仏」ということなのです。「衆生を一子のごとくに憐念す」る仏の心が、衆生をして「子の母をおもうがごとくにて 衆生仏を憶」せしめるのです。衆生を念ずる仏の心が、衆生の上に、仏を念ずる心呼びおこし、成就するのです。ですから、わたしたちが念仏申すということは、わたしを念じたもう仏の心に出会ってゆくことなのです。

⑥ 称名「称」

親鸞は『一念多念文意』に、

「称」は、御なをとなうるとなり。また、称は、はかりというところなり。はかりというは、もののほどをさだむることなり。名号を称すること、とこえ、ひとこえ、きくひと、うたがうところ、一念もなければ、実報土へうまるともうすところなり。

「称」の字は、秤の意味なのです。秤は「斤両を正す」道具です。品物の重さと分銅の重さがピタツとひとつに定まることです。称名とは、仏の名告りの心と、その名をとなえる衆生の心がピタツとひとつになったことなのです。念仏申すということは、実は、念仏も うさるべしという仏の呼びかけを聞き、うなづくことです。

⑦ 聞名

自分が称えることに意味があるかないかという自己関心に目が奪われていると、自分の称え方はこれでいいのだろうかという疑問からどうしても離れられません。称える者の意図や意識の問題でなく、聞く側の問題です。信心が問題になるのは聞く側において問題にされなければならぬのです。親鸞は第十七願の諸仏称名の願が、第十八願と分けて立てられていることを明らかにされました。

第十八願の成就文（『無量寿経』）

諸有衆生 聞其名號 信心歡喜 乃至一念

至心回向 願生彼國 即得往生 住不退轉

唯除五逆 誹謗正法

あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん。心を至し回向したまえり。かの国に生まれんと願すれば、すなわち往生を得て不退転に住す。唯五逆と誹謗正法とを除く。

「名を称えてよろこぶ」とはなっていない。「諸仏が称えるその名を聞いて歡喜する」となっています。称名と聞名、はたらきかけと受けとめという関係で念仏が表されています。

七 弥陀章

法藏菩薩因位時
在世自在王佛所

【書き下し】

法藏菩薩の因位の時、

世自在王仏の所にましまして

【意訳】

法藏菩薩、それは昔、国と王位をすてて、

道を求めておられたころの、あなたの名。

あなたは、世自在王仏という師に おつかえし、

①法蔵菩薩の物語

遠い過去、はるかな昔に一人の王様がいました。王様は権力と栄誉の頂点に立ち、何不自由ない暮らしをしているはずでした。でも、王様には大きな悩みがあったのです。それは「私はどこから生まれてきたのか、何のために生きるのか、どこへ行くのか」という謎が解けないことでした。いろんな賢い人たちが王様に答えを教えましたが、王様はどの答えにも満足することができませんでした。それどころか、いよいよ悩みは深まり、この謎が解けないかぎり生きていてもむなし、死ぬにも死にきれないという大きな不安におそわれたのです。

ある時、王様は「世界で一番自由自在に生きる王者と名のる仏」の噂を聞き、その人を探して会いに行きました。その人は、自分の着物さえ持つておらず、ボロを身にまとい、小さな鉢を一つ持っているだけでした。それでいて、「世界で一番自由自在に生きる王者」だということです。

その人は、澄んだ目で王様を見つめて、静かに話し始めました。「人はみな、迷いから目覚めて仏に成るために生まれてきたのです。どんな人も、深くて広く重い、いのち

の世界から生まれて、それぞれに大きな役割をもち、大切な使命を与えられて生きているのです」

それは今までに聞いたことのない言葉でした。王様は深い喜びに包まれ、自分も仏に成りたいという志を起し、すぐに国を棄てて王位をすてて、その人の弟子になり、法蔵比丘と名のつたのです。

因位：菩薩が仏に成るための修行期間の地位のことです。阿弥陀仏の因位が法蔵菩薩です。

②菩薩

菩薩とは、菩提（さとり、覚）と薩埵（存在、衆生、有情、決意・志願）という二つの言葉が結びついた言葉です。「菩提を求める衆生」「菩提を決意・志願している者」という意味であります。

法蔵菩薩が↓願を発し↓

その願が成就し↓阿弥陀仏となる

③法蔵菩薩と世自在王仏の出会い

時有國王。聞佛說法、心懷悅豫、尋發無上正眞道意。
棄國捐王、行作沙門、號曰法蔵。
高才勇哲、與世超異。詣世自在王如來所、稽首佛足、
右繞三市、長跪合掌、以頌讚曰。

【書き下し文】

時に國王ましましき。仏の説法を聞きて心に悦予を懷き、
尋ち無上正眞道の意を發しき。國を棄て、王を捐てて、行
じて沙門と作り、号して法蔵と曰いき。高才勇哲にして、
世と超異せり。世自在王如來の所に詣でて、仏の足を稽首
し、右に繞ること三市して、長跪し合掌して頌をもつて讚
じて曰わく、

法蔵菩薩は、世自在王仏に出会い、國王という所有欲・
支配欲を手にいれながら、仏法を聞き、悦予しそれを惜し
げもなく捨ててしまい、自ら沙門（修行者）として道を求
めていこうとします。

無上正眞道の意…

このうえなき仏のさどりの智慧を求める心。すなわ
ち、大菩提心のこと。

仏の足を稽首し合掌して…

印度の礼法。両膝と両肘頭を地につけ、仏足を手に
おし頂いて、頭面にふれて最上の挨拶をする。おわつ
て仏を自身の右側を内にして右回りに三周する。そ
して、仏の前に両膝を地につけ、足の指先で地を支
えて合掌する。

觀見諸佛淨土因
國土人天之善惡
建立無上殊勝願
超發希有大弘誓
五劫思惟之攝受
重誓名聲聞十方

【書き下し】

諸仏の淨土の因、国土人天の善惡を觀見して、無上殊勝の願を建立し、希有の大弘誓を超發せり。

五劫、これを 思惟して攝受す。

重ねて誓うらくは、名声十方に聞こえんと。

【意訳】

仏たちの世界の成り立ちと、国と人とのありさまを見きわめて、みずから淨らかな国土を建てようという、すばらしい願いを打ち立て、あらゆるいのちあるものと共に生きようというかつてない誓いをおこされました。

はるかに長い時間をかけて、思いを深め、数多くの願いを選びとり、そのこころをみずからの名のりにおさめ、どうか、私の名と そのいわれをよく聞き分けてくださいと願い成就の誓いをこめて十方の世界に呼びかけました。

④法蔵菩薩の物語（二）

法蔵菩薩は、その師（世自在王仏）に質問します。「どうか教えてください。あらゆるいのちあるものと共に生きる清浄な国土を厳かに整えるにはどうすればいいのでしょうか」

師は容易に教えてくれません。「それはあなたが自分で知るべきことだ」

法蔵はさらに問います。「とても私の思いだけでは知ることができません。どうか教えてください。すでに目覚めた人々（諸仏）は、どのような願いと行いによってそれぞれのすばらしい国土を完成させたのかを知りたいのです」（浄土因）

師は、法蔵の願いの大きさに心うたれて法蔵を激励し、二百一十億もの諸仏の国土や、そこに住む神々や人々のありさまを、善・悪ことごとく説きあかしたのです。

それらをよく観察し、見極めた（観見）法蔵は、いよいよこの迷い多い生死の現実が痛ましくなり、共に生きたいと願う者すべてが生まれることのできる極楽という浄土、安楽の国土を建立しようという、この上ないすばらしい願

いを打ち立てました（建立無上殊勝願）。

そして、もしこの願いが成就されなかったならば、私も永遠にさとらない、仏にはなるまい、といういまだかつてない大きな弘い誓いを起こしたのです（超発希有大弘誓）。その願いは、仏教における「五劫」、世界が生成し、破壊を繰り返し、また生成するというような、気の遠くなるようなはるかに長い時間を経て思い続けられ、深め、練り上げられていました。

そして、限らない浄土の中から善と悪、広さ、深さなどを選び捨てて、本願を洗練し、ついにその心を自らの名のに摂め取って、重ねて、全宇宙（十方の世界）に向かって次のように宣言したのです。

「仏としてのわたしの名前、阿弥陀仏のいわれをよく聞き分けて、わたしの名を呼んでください。貧しさに苦しむ人よ、わたしの声が聞こえますか。わたしの名を称えてください。わたしは決してあなたを見捨てないで、あなたと共に生き、あなたをわたしのいのちといたします。十方世界の人々よ、わたしを呼ぶときには、南無阿弥陀仏と称えてください」（重誓名声聞十方）

こうして、みずからの生の謎を解き、生きることの意義

に目覚めた人は、解放し、解放され続けていくことを願って、終わりのない歩みを始めたのです。その願いは世の光となつて永遠に人々の心に生きつづけているのです。現在もなお、ここに。

五劫：

一劫の五倍、非常に長い時間をいう。法蔵菩薩が願して衆生救済と浄土建設のために長年月を要した修行を「五劫思惟」と呼ぶ。

摂受・摂取：

サンスクリットからいえば、「まったく完全に消化された」「まったく完全に理解され、納得され、把握された」。五劫の間これを思惟して摂受されたという意味は、「あらゆる衆生の上においてそのことがあてはまる」「一人としてここから免れているものはない」「例外はない」ということです。

⑤法蔵菩薩と世自在王仏の関係

「法蔵菩薩の物語」は、『大無量寿経』に説かれている。『大無量寿経』は釈尊が弟子阿難に法を説く經典（物語）です。その經典の中に、「法蔵菩薩の物語」が説かれています。

法蔵菩薩の話は、私たちにとって「出遇いとは何か」ということを物語るものです。釈尊は、この世の非常なる現実との遭遇（老病死）と、一人の沙門（修行者）との出遇いがきっかけになって国を棄てて王子の位をすてて道を求める旅に出ました。『大無量寿経』では、釈尊が世に現れるより以前に、「いのち」の源を問いたずねて終わりのない歩みをしはじめた人がいたことを語られています。その人が法蔵菩薩です。法蔵菩薩は世自在王仏に出遇い、国を棄てて王を損て、さらにまた国土（浄土）を求められた。求めただけでなく「無上殊勝の願」を建てられた。その願は迷いを平等にしている一切外道の凡夫人（仏から遠い存在）の上に、仏と遇い、仏となるということをして成り立たしめたということです。そして、その願が成就して阿弥陀仏とられたのです。

法蔵菩薩が世自在王仏に問われたことの大事な意味は、

「仏の世界は仏から教えられるより他には知りようがない」ということ。仏の世界は仏から知らされるといふ、法蔵菩薩も仏に会うことで、仏（法）の世界を親見し、自らが衆生救済のために国土（浄土）を建立された。

何としても仏（法）の世界を示したいという意味を表すのが法蔵菩薩。しかしその世界は、その世界から知らされなければ知りようがないのだということを表すために世自在王仏という名を立てて、南無阿弥陀仏の世界を示された。その関係は物語りに留まることではなく、私たちに真実の世界を表しているのでしょう。

⑥法蔵菩薩の本願

浄土を建立する願いとして、『大無量寿経』には、世自在王仏という仏の教えを聞いて、自ら法蔵と名告って四十八の願が説かれています。

第一願

設我得佛、國有地獄餓鬼畜生者、不取正覺。

たとい我、仏を得んに、国に地獄・餓鬼・畜生あらば、正覺を取らじ。

第二願

設我得佛、國中人天、壽終之後、復更三惡道者、不取正覺。

たとい我、仏を得んに、国の中の人天、壽終わりての後、また三惡道に更らば、正覺を取らじ。

（中略）

第十二願 光明無量の願（南無不可思議光）

第十三願 壽命無量の願（歸命無量寿如来）

（中略）

第十七願 諸仏称揚の願 眞実の行願（念仏）

第十八願 至心信樂の願 眞実の信願（正信）

その願の内容としていろいろなことが言われているけれども、重ねて「重誓名声聞十方」と言われるように、突き詰めて言えば「仏のみ名が十方に聞こえる」ということです。仏が仏自身で「如来ここにあり」「仏ここにあり」と名告られたことです。

〔参考〕 四弘誓願

すべての菩薩には、共通する大きな課題というか、志願があります。菩薩の総願と呼ばれます。

衆生無辺誓願度…数限りない人々を済度しよう。

煩惱無数誓願断…尽きることない煩惱を断じよう。

法門無量誓願学…量りしれない仏法を学びとろう。

仏道無上誓願成…仏の無上のさとりを成就したい。

しかし、法蔵菩薩は、さらに別願と呼ばれる独自の誓願を起こしたのです。（無上殊勝の願・希有の大弘誓）

普放無量無邊光
無碍無對光炎王
清淨歡喜智慧光
不斷難思無稱光
超日月光照塵刹
一切群生蒙光照

【書き下し】

あまねく、無量・無辺光・無碍・無對・光炎王、

清淨・歡喜・智慧光、不斷・難思・無稱光、

超日月光を放つて、塵刹を照らす。

一切の群生、光照を蒙る。

【意訳】

あなたの名は、世にあまねく光を放ち、はかりなく、は
てしなく、さまたげなく、ならびなく、炎のように燃え
清らかさ、よろこび、深い智慧を輝かせ、たえることなく、
思いや言葉では尽くせない光は、日月よりも明るく、世
のすみずみを照らし、あらゆるいのちがその光の恵みに
あずかるのです。

⑦ 十二の光

法蔵菩薩の願いは成就し、いまや永遠の仏・阿弥陀仏と
成ったその本願の浄土は、世の光となって、普くこの世の
闇を照らすはたらきをしています。そのはたらきが十二の
光の名としてあらわされているのです。

人類の歴史は、手を使い、手の延長として道具を使い、

火を起こし守ることによって文化を生み出してきたといわれます。それは闇をおそれ光を求め続けてきた歩みであったともいえるでしょう。

一、無量光

はかり知ることのできないこと。有限の人生を生きるすべての人々の姿を照らす。

二、無辺光

ここから先は行き届かないというような際はな
いこと。

三、無碍光

何ものにも、さえぎられることがないこと。

四、無対光

対比するものがなく、他の何ものとも比較のし
ようがないこと。

五、光炎王

私たちの愚かさからおこるさまざまな迷いを焼
き尽くすこと。

六、清浄光

貪りに支配される私どもの心の汚れに気づかせ、

心が清らかになるように、はたらきかけて
くださること。

七、歡喜光

怒りや憎しみの深い私どもの心を和らげるよう
に、はたらきかけてくださること。

八、智慧光

真実に暗く、愚かで無知な私どもに無知をしら
せ、無知の闇を破ってくださいること。

九、不断光

一刻も途絶えることなく、私どもを照らし続け
てくださいること。

十、難思光

凡夫の思いによつては、到底量り知ることので
きない智慧の光明のこと。

十一、無称光

どのような方法によつても説明しきれない智慧
の光明のこと。

十二、超日月光

夜の闇におびえて光を求め、心の闇をおそれて
光を求める姿に対して、昼夜なく、内外なく闇

を破り開いていくこと。

⑧光すなわち如来

仏法の智慧というものが光で表される第一の意味は、わたしたち一人ひとりに抜きがたくあるところの、自分の体験への執着そのものを破るはたらき、それが仏法の智慧だということなのです。つまり仏法の智慧というのは、あれも知っているこれも知っているということではなくて、まわりがはっきり見えるということなのです。そしてそのことは同時に、手さぐりしている自分自身はつきり見えてくるということなのです。見えてくるという言い方をしますと、なにかまわりをただ眺めているだけのようですけれども、そうではなく、ほんとうに見えたというときには、その事実にしたがつて生かされてゆくということになるのです。それがたとえ、今までの自分の体験によって培ってきたものの考え方を、その根底から否定し、ひっくりかえすようなものであっても、それが事実であるかぎり、事実を事実として受けとめ、生きていく勇氣と情熱としてはたらくものなのです。

つまり、手さぐりの生活というものにおいては、どこま

でもただ自分の体験だけが依り処になっているのですが、そのときには、なにか自分自身を依り処にして生きているようなのですけれども、実はそうしている自分自身はすこしも見えていないということなのです。自分自身というものは、実は、他の人と出会ってゆくなかで次第にあらわになり、見えてくるものなのです。他の人の生き方にふれたときはじめて、ああ自分の生き方もこうだったのか、ということがわかってくるのです。自分の体験したことしか見えていない人には、自分のほんとうの生きざまというものもまた見えないものなのです。他の人がそれぞれ一生懸命に生きておられるすがたにふれたとき、ああ、今までの自分はこうだったのかということが、逆に知らされてくるのです。つまり、自分を超えた世界にふれたときはじめて、自分のすがたも見えてくるのです。

本願名號正定業
至心信樂願為因
成等覺證大涅槃
必至滅度願成就

【書き下し】

本願の名号は正定の業なり。

至心信樂の願と因とす。

等覺を成り、大涅槃を証することは、

必至滅度の願成就なり。

【意識】

こうしてあなたは願いの国、浄土の永遠の仏、阿弥陀仏

と成られ、その名のりは南無阿弥陀仏という真実の言葉となり、その言葉は人が生きて往く方向を正しく定めるしごとをしています。あなたのまごころはいのちの根源にはたらきかけ、私に まことのこころを、おこさせます。私が生きることの意味に目覚めて、さとることができるとしたら、それは、必ずさとりに至らせるという、あなたの願いが成就しているからなのです。

⑨ 願い・国土・名・言葉

ここには如来の本願が三つうたわれています。

一、「本願名号正定業」

第十七願 諸仏称揚の願 真実の行願（念仏）

世界中のみほとけたちが私を称賛し、南無阿弥陀仏となった私の名前を呼んでくれますように。

二、「至心信樂願為因」

第十八願 至心信樂の願 真実の信願（正信）

すべての衆生が、純粹な心・喜びとねがい・生ま

れようとする意欲を成就して私の国・浄土へ生まれることができますように。

三、「成等覚証大涅槃 必至滅度願成就」

第十一願 必至滅度の願

私の国に生まれた人たちがめざめた人々と共に生き、必ず大きなさとりに至りますように。

必至滅度の願

第十一願

設我得佛、國中人天、不住定聚 必至滅度者、不取正覺。

たとい我、仏を得んに、国の中の人天、定聚に住し必ず滅度に至らずんば、正覺を取らじ。

⑩ 正定業

「本願の名号は正定の業なり」というのは七祖でいえば善導に依っておられます。正定業ということばは助業と區別を立てたものであり、また一般の仏教に対しては雑行と

いうことから區別を立てたことばであります。正定の業、これは如来と遇う業です。行ということからいえば如来と遇うところの行です。

善導の「五正行」

専らに阿弥陀仏を礼拝し、専らに浄土の三部経を誦誦す。専らに浄土の依報莊嚴を觀察す。専らに阿弥陀仏の名を称する。専らに阿弥陀仏を讚嘆供養する。

一、礼拝（阿弥陀仏を礼拝する）

二、誦誦（浄土の經典を誦誦する）

三、觀察（阿弥陀仏とその浄土の相を心におもいうかべて觀察する）

四、称名（阿弥陀仏の名号を称える）

五、讚嘆供養（阿弥陀仏の徳を讚嘆する）

善導はこの五つの正行を、さらに正定業と助業に分けています。すなわち、第四の称名念仏を正定業とし、他の四つを助業とするのであります。その称名念仏について、『観

經疏』に

一心に弥陀の名号を専念して、行住座臥、時節の久近を問わず、念念に捨てざるをば、これを「正定の業」と名づく、かの仏願に順ずるがゆえに。

と説いて、称名念仏こそが阿弥陀仏の本願に順ずる行であり、まさしく往生が定まっていく行業であるとして、それを「正定業」と名づけたのである。そして、他の四つの行業は、往生の正因ではないが、正定業である称名念仏を助ける行という意味で「助業」とした。

このように、「正定業」である称名念仏こそが往生の正因であるとともに、助業もまた、自我に執着する人間を純粹なる求道の実践である正定業へ転ぜしめるものであることを明らかにしたのであります。

法然の選択

善導の「五正行」を受けて、『選択集』において、

それ速やかに生死を離れんと欲わば、二種の勝法の中に、しばらく聖道門を闔きて、選びて、浄土門に入れ、浄土門に入らんと欲わば、正雜二行の中に、しばらくもろもろの雜行を抛ちて、選びて正行に歸すべし。正行を修せんと欲わば、正助二業の中に、なお助業を傍にして、選びて正定を専らすべし。正定の業とは、すなわちこれ仏の名を称するなり。称名は必ず生まるることを得、仏の本願に依るがゆえに。

と述べて、称名念仏こそが正定業であるとして勧め、称名念仏を選び取ったのであります。

「帰敬の文」・「弥陀章」のまとめ

① 「帰命無量寿如来・南無不可思議光」

親鸞は仏陀とは無量寿如来、不可思議光如来のことだといっています。

しかし、ここで注意しておかなければならないことがあります。それは「限らない光と生命をもつものが仏陀であって、そのような仏陀がどこかにいらっしやる」という理解がされてはならないということです。そうであれば、予想・予定になってしまうからです。限らない光と生命が意味することは、次のようなことです。

限らない光とは、仏陀の教化のいたらぬところがないことを意味し、その教化からもれるものが一人もないことを指すのです。ですから、私たちが仏陀を限らない光といふときには、この自分が何をにおいてもまず、教化されたといふことがなければなりません。次に限らない生命とは、私たち衆生がいつ生まれたとしても、仏陀とお会いできることを意味するのです。つまり、釈迦如来は特定の場所、特定の時間だけを生きられた方であって、違う場所、違う

時に生まれたものは、お会いすることができません。ですから、仏陀のことを限りなき生命というのは、仏陀の生命の大きさをあらわすのではなくて、私たちがいつ、どこに生まれても仏陀にお会いできることをあらわすからです。したがって、私たちが仏陀を限らない生命と呼ぶときには、まずこの身が仏陀にお会いできたということがなければなりません。

② 「法蔵菩薩の物語」と私たち

如来の本願、弥陀の本願とは何のことであるかを考えてみなければなりません。

『正信偈』の「法蔵菩薩の物語」を要約すると次のようなことが述べられています。「法蔵という菩薩が世自在王仏という仏陀の下にあって、法を聞き、仏国土を建説し、あらゆる人々をさとらしめたいと誓われ、その誓いが実現して阿弥陀仏となられたのである」ということになります。この法蔵菩薩・世自在王仏のことは『無量寿経』に出ておりまして、親鸞はそれを『正信偈』に引用されたのです。

私たちは実在した仏陀といえば釈迦如来しか考えつきま

せんから、法蔵菩薩や世自在王仏と聞きましても、一種の神話、架空の話にしか思われませんが、親鸞はどうしても必要なことと考えられたからこそ『正信偈』に引かれたのでしよう。

それでは法蔵の誓いとは何でしょうか。それは一切の衆生を教化し、さとらしめるということです。これだけなら当然のことであって、法蔵菩薩に限ったことではありません。法蔵菩薩の誓願の特異な点は、仏の名を称することをもって行とし、その行によって浄土に生まれ、無上のさとりを得るということにあります。

一切衆生を教化し、さとらしめるのに、仏の名を称することををもって行としたものが法蔵菩薩の本願ですが、ここに問題があります。それは、阿弥陀仏の名がどうして本当に仏の名であるかわかるのであろうか、ということです。「經典に仏の名であるといわれているから仏の名であらう」では、疑いを残すことになります。ここに信ずるといことが、つまり、信心が問題になる理由があります。

たとえば、称名を行としましても、それを口にとなえるだけであれば、結局、浄土に往生することも、さとりを開くことも未来に希望を託することにしかならず、行として簡

単だといっても、期待と不安の中に閉じ込められるよりはかはなくなります。これは信心がはっきりしないことに起因します。

私たちにどうやって、仏から教化を受けているとわかるのでしょうか。ここに、日頃、私たちが考えている仏陀とまったく質を異にするものがあるのです。

ふつうには、南無阿弥陀仏の名号を仏の名であるとして、それを口にし、行ずることでも何かを得ようとするのですが、その時には、名号は仏の名といわれる物質になってしまっているのです。そうではなくて、ここに問題になっていることは、名号が文字どおり仏の名であると信ずることが求められているということです。そして仏の名とは、私たちの世界と違って、仏の世界があることをあらわすものです。私たちが努力して、修行して、名号が仏の名であること証明するわけではありません。なぜなら、私たちはもとより、そうした修行から遠くはなれた存在であるからです。そうしますと、名号が仏の名号であるかぎり、名号が私たちを教化し、私たちをさとらしめるといいう意味になります。その意味では、まったく他力なのです。

私たちは漠然とした「仏陀」についてのイメージを持つ

ていますが、もともと仏陀を知らないのです。見たことも会ったこともないのです。私たちが知っているのはせいぜい、釈迦如来とそのことば、または仏像ぐらいです。ですから、仏陀ということをお陀より知らされるよりほかないわけです。

先にいった、法蔵菩薩の本願とは、この仏陀ということをお陀一人ひとりの中に成就しようとしたものです。そして、世自在王仏が語られるのは、仏陀ということは仏陀より知らされなければ私たちに知られようがないことを示すためです。法蔵菩薩と世自在王仏を語ることで、南無阿彌陀仏の名号が文字どおり仏の名であり、仏の名は仏おわしますことをあらわすのです。そして、仏おわしますとは仏陀を知らない私たちに、有無をいわせない、疑いのような自分自身に出会わせ、つまり私たちおよび私たちの世界は、どこまでも愚であり、穢土であることを知らせ、だからこそみな同朋であり、力む必要のないことを知らしめることです。この自覚を眞実信心ということです。

③親鸞の本願の受けとめ

彌陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ（中略）自身はこれ現に罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねにしずみ、つねに流転して、出離の縁あることなき身としれ

（『歎異抄』後序）

【意訳】

阿彌陀如来が五劫という長い時間をかけて、すべての存在を救おうという深い思いから建てられた誓願を、よくよくこの身に引き当ててみると、それはひとえにこの親鸞一人を救うためであったのだ。思えば、はかり知れない罪業をもったこの身であるのに、たすけようと思いたってくださった本願の、なんともつたないことか。

八 釈迦章

如來所以興出世
唯說彌陀本願海
五濁惡時群生海
應信如來如實言

【書き下し】

如来、世に興出したまうゆえは、
ただ弥陀の本願海を説かんとなり。
五濁悪時の群生海、如来如実の言を信ずべし。

【意識】

思えば、釈迦如来がこの世に出てくださったのは、ただ

ひとえに 海のように深く広いあなたの願いを説くため
でありました。

濁った世界、悪い時代に生き、苦しみの海におぼれてい
る、いのちあるものは仏のまことの言葉を信じるべきな
のです。

①如来

「如来」とは仏さまのことです。ではなぜ如来というの
でしようか。

「如」は「ごとし」と読みます。ごとしの世界から現わ
れやって来たから「如来」というのです。そのことを仏像
の絵や彫刻の第一人者である西村公朝さんは、次のように
わかりやすく説明しています。

たとえば「山」とは人間が勝手につけた名前であつて、
実は土と石などが盛り上がってできている形を山と呼
んでいるのですから、つまりこれは「山のごとし」で
す。「海」といっても、雨や川水が集まってできたこ
ろですから「海のごとし」です。こうなると、私も

「人のごとし」。みんな「如し」ですから、この自然界は如の集まりです。

次に一切のものはそれぞれが何から成立しているかといえ、地・水・火（太陽の熱量）・風（空気）の四元素です。これらによって構成された宇宙の大きな魂から生まれてきたから「如来」です。ところが、死ねば土や空気にはばらばらと散って、もどってします。つまり如にかえってしまう「如去」です。

西村さんは、このような宇宙のちから、はたらき、「私」たちのいのち、それらを彫刻や絵画で人格化して表現したものがさまざまな仏像・如来像なのだといいます。

形にあらわすとは、名前や言葉でもあります。「阿弥陀如来」というのは、量りしれない寿と光のごとくにはたらくき続けている仏の願い・本願に名前をつけたのです。その名前にこめられた真実の心が言葉になったのが「南無阿弥陀仏」なのです。

② 釈迦如来（ぶつだ・釈尊）

ブッダは今から約二千五百年前にインドの釈迦族の王子として生まれた。名前を「ゴータマ・シッダールタ」といいました。立派な宮殿に住み、いろいろな才能にも恵まれ、何ひとつ不自由なく暮らしていました。ところが、命あるものは必ず年老い、病気になる、死んでいくという事実（老病死）に直面し、たいへん悩みます。なぜ人間は生まれてきたのだろうか、苦しみや悩みから解放される道はないだろうか、と。

シッダールタは、苦悩を超える道を求めて、王子の位を棄てて城を出ていきます。二十九歳のときのことでした。その後、瞑想修行や苦行を重ねても、なかなか苦悩を超える道は見つかりませんでした。ついに三十五歳のとき、すべてのものは「縁」によって成り立っているという事実が目覚めました。生まれる縁がととのえば生まれ、死ぬ縁がととのえば死ぬ。その事実を受け入れられずに、ただ生のに執着するところに、苦しみの原因があるのだと気づいたのです。（十二支縁起）

シッダールタは、これ以降、さとりを開いた人、目覚め

た者を意味する「ブツダ（仏陀）」という言葉で呼ばれるようになりまし。そして自らが目覚めた世界を、苦しみ悩む人々に説いていきました。ブツダは八十歳で入滅するまで説法し続けます。

一、天上天下唯我独尊

『無量寿経』にブツダが誕生したときの宣言として、「吾当に世において無上尊となるべし」と説かれています。ブツダは誕生して七歩あゆみ、「私は人生において、この上なく尊い者とならなければならぬ」と言われたと示されています。

二、老病死

ブツダは『阿含経』に自ら次のように語っています。

私自身、老いるもの・病むもの・死ぬものであり、老いること・病むこと・死ぬことを避けられぬ身でありながら、他人の老い・病い・死を見て、あざけつたり

厭つたりすべきであろうか。これは正しいことではない。私はこのように考えて、青春に対する空しい誇りと健康に対する空しい誇りと存在に対する空しい誇りをすべて棄てた。

「人は必ず老い・病み・死ぬべき身を生きている。今私は、若さを誇り健康を誇り王子としての豊かな生活を謳歌しているが、これらすべては、老・病・死の前では、何の意味もなく、どれも空しいものでしかないのか」。このようにシッダールタは悩んだのです。

三、十二支縁起

「老死」「生」「有」「取」「渴愛」「受」「触」「六処」「名色」「識」「行」「無明」以上のように、ブツダは十二支縁起によって老死（人間苦）の原因をうちに求めて識に到達し、その究極の根本原因を人間の「無明」において突き止めたのである。このことは、われわれの苦悩が、外的な条件によって生ずるのではなく、自らの内なる無明より生起することを意味しています。

③ 釈迦如来と阿弥陀如来

ここでの「如来」とは、釈迦如来のことです。仏教は普通、開祖・釈迦の説いた教えにもとづいて形成された宗教であると説明されます。しかし、親鸞は必ずしもそうは言いません。それが『正信偈』のこの文句です。

【原文訳】

釈迦如来が、この世に如来として現われたのは、ただ一つのことをするためでありました。それは海のように深く広い阿弥陀如来の本願を説いて人間を成就する道を興すことなのです。

だからこの五つの濁りに満ちて不透明などうしようもない悪い時代にあって、独りで生きることができず、群がって生きつつ苦しみの海におぼれている私たちは、如来の説く真実ありのままの教えの言葉を信じるべきなのです。

つまり、釈迦如来は釈迦如来に先立って仏・如来と成った阿弥陀如来の本願すなわち何ものにもさまたげられない

一筋の道をたずね、それを通して如来と成った、ということです。これは本願・念仏を信じる親鸞ならではの仏教の伝え方です。

④ 五濁

五濁とは、人間が作り出す五つの濁りによって世間の人の心が不透明になること。

- 一、劫濁（時代の濁り、天災や戦争などの社会悪のことでもある。）
- 二、見濁（思想や見解の濁り。）
- 三、煩惱濁（煩惱に支配されて名誉や利欲、権力を求めるあり方。）
- 四、衆生濁（衆生・生きているものどうしのつながりが濁っていく。）
- 五、命濁（人の寿命も、ものの寿命も短くなり、いのちの感覚が失われる。）

これは、とてもきれいなことでは生きていけない濁りだら

けの世のありさまを厳しく批判するものです。そんな世と時代にあつて、なおかつ生きる意味を見出すには、お釈迦さまの勧めによつて、如来の願いがこめられたいのちの言葉に出会い、信じるしかないというのが親鸞の心なのでしよう。

⑤ 応信如来如実言

親鸞は、「五濁悪時」のこの世を生きる私たちに、釈迦如来の真実の言葉を信じるべきであると述べています。私たちに、何を信じて生きているのか問いかけられているのでしよう。また、「五濁悪時」のこの世であるからこそ、信じるものが見当たらないのではないでしようか。親鸞は、釈迦如来がこの世に出てくださったのは、ただ私たちに真実の言葉（阿弥陀如来の本願・念仏）を示すためであると述べています。

能^{のう}發^ほ一^{いち}念^{ねん}喜^き愛^{あい}心^{しん}
不^ふ斷^{だん}煩^{ぼん}惱^{のう}得^{とく}涅^ね槃^{はん}
凡^{ぼん}聖^{しょう}逆^{ぎやく}謗^{ぼう}齊^{さい}廻^え入^{にゅう}
如^{にょ}衆^{しゅう}水^{すい}入^{にゅう}海^{かい}一^{いち}味^み

【書き下し】

よく一念喜愛の心を発すれば、
煩惱を断ぜずして涅槃を得るなり。
凡聖、逆謗、ひとしく回入すれば、
衆水、海に入りて一味なるがごとし。

【意訳】

信じ、喜び、愛する心が、ひとたび、おこる時、煩いや

悩みを断たなくても、仏のさとりを得ることができません。

凡人も、聖者も、逆らう人も、けなす人も、ひとたび心を回せば、みなひとしく救われるので、あたかも、さまざまな水がみんな、大海に入って一つにとけあうようなものです。

⑥ 煩惱

煩惱とは、身を煩わせ、心を悩ませ、かき乱し、惑わせ、汚していく心のはたらきです。いくつかの煩惱を紹介しましょう。

【根本煩惱】（代表的な六つの煩惱）

- 一、貪…むさぼる心
- 二、瞋…いかる心
- 三、慢…おごりたかぶる心
- 四、痴・無明…おろかな心
- 五、疑…疑う心

六、悪見…正しくない見解

【隋煩惱】（さまざまな煩惱）

- 一、忿…殴ろうと思うほどに怒る心
- 二、恨…うらむ心
- 三、惱…相手にかみつく心
- 四、覆…罪をかくす心
- 五、誑…あざむく心
- 六、諂…だましへつらう心
- 七、憍…おごりよいしれる心
- 八、害…害する心
- 九、嫉…ねたむ心
- 十、慳…けちな心
- 十一、無慚・無愧…はじることなき心
- 十二、不信…信じない心
- 十三、懈怠…おこたる心
- 十四、放逸…なまける心
- 十五、昏沈…重く沈んだ心
- 十六、掉挙…動くさわがしい心

六、失念…ものを忘れる心

七、不正知…まちがって知る心

八、散乱…みだれる心

このようにして煩惱の正体を知ること、道は開けるとい
うわけです。「不断煩惱得涅槃」つまり、煩いや悩みを断
ちきらなくても、涅槃というさとりを得ることができると
いうのです。そんな私たちがそのままできとれる、救われ
るのはなぜでしょう。それは「あなたを目覚めさせよう、
迷わず成仏させよう、決して見捨てないで育てよう」そう
いう願いをかけ続けている人がいるからです。その人こそ、
永遠の仏、阿弥陀仏です。

⑦ 不断煩惱得涅槃

いま如来に気づくということ、この身に如来を知るわ
けですから、「この身は罪悪深重煩惱熾盛である。だから
だめなのだ」というのであっては、これは助かった助から
ぬもないわけです。問題にならない。罪悪深重煩惱熾盛だ
という、そのことが助かるのです。文字どおり「不断煩惱

得涅槃」ということです。それはその罪悪深重煩惱熾盛の
衆生の身が影そのものだからです。そこが如来を知るとい
うところですよ。

喜愛という言葉でいわれるのは、裁き続け、いじめ続け
てきたこの身をわが身として受け入れることができた、認
めることができたということです。影そのものということ
を知ることによって、これを受け入れることができた。認
めることができたという、それが喜愛の心です。決して無
罪を証明する心に受け入れられたのではないということ
です。そのことを別の言い方で「不断煩惱得涅槃」と言われ
ているのです。それは無罪証明をしようとしている日ごろ
の心が翻されて、わが身を無罪ということを立てるのでな
しに、有罪そのもののわが身をわが身として受け取るこ
とができる。そのことが、浄土に往生したということだとおっ
しやるわけです。

⑧ 凡・聖・逆・謗

「凡聖」というのは対になる言葉、対概念です。凡夫に
対して聖人、聖人に対して凡夫。化身として立てられ、そ

それが実体化されたものにより近いと思われるのが聖です。そこから遠いものは凡ということになります。ある目的、ある理想に近いものが聖人、遠いものが凡夫です。

親鸞はこの「凡聖」という事柄については、凡とか聖とかいう事柄が実体的な意味を持ってこないところまでわれわれを導かれます。それはその前の「不断煩惱得涅槃」のところ、浄土往生ということが出てくるからです。化身を実体化したところには凡や聖が生まれてくるであろうけれども、化身を実体化しなくても、如来が他の手を借りずに自らをわれわれに知らせるといふ場合には、凡とか聖という違いは何の意味も持たないわけです。

「逆」は五逆罪を意味します。倫理性ということを持つ問題です。「謗」は謗法を意味します。法を誹謗するので、すから、これは宗教性の問題です。ここでは五逆そのもの、謗法そのものを問題にしているのではなくて、五逆ということ、倫理性の欠落したものを、謗法ということ、宗教性が欠落したものを表しているわけです。そこに倫理性が高いとか低いとか、宗教性が豊かであるとか劣っているとかということによって、人間の違いがあるかのようなことが立てられてきます。そういったことはもはや問題になら

ないということ、「凡聖逆謗齊廻入」と言われるのでしよう。

⑨真宗の人間観（身の事実）

- 一、煩惱具足の凡夫
- 二、罪悪深重煩惱熾盛
- 三、具縛は、よろずの煩惱にしばられたるわれらなり。煩惱は、みをわずらわす。悩は、こころをなやますという。
- 四、いずれの行もおよびがたき身
- 五、そくばくの業をもちける身
- 六、さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし

攝取心光常照護
 已能雖破無明闇
 貪愛瞋憎之雲霧
 常覆眞實信心天
 譬如日光覆雲霧
 雲霧之下明無闇

【書き下し】

摂取の心光、常に照護したもう。
 すでによく無明の闇を破すといえども、
 貪愛・瞋憎の雲霧、
 常に眞実信心の天を覆えり。
 たとえば、日光の雲霧に覆わるども、
 雲霧の下、明らかにして闇きことなきがごとし。

【意訳】

仏の心は、すべてをおさめとつてすてない光であり、常に私たちを照らしまでもつてくださいます。
 すでに迷いの闇は破られているのですが、むさぼり、とらわれ、いかり、にくしみの雲や霧が、常に仏の眞実のこころの空をおおってしまします。
 それでも、たとえば日光が雲や霧におおわれても、その下が明るくて、闇にならないように、仏の眞実のこころは、いつも澄みきっているのです。